

# 翼は心につけて



星  
佐  
益

す、いそうす、いそうす、いそう

ら。」という。それから数日間、朝と放課後作業を続け見違えるほどきれいになつた。このあと、ニスを塗つて仕上げるなど張りきついている。

校歌に、「博士山はるかに仰ぎ」「野尻川せせらぐ辺り」と歌われているように、山青く水清しの言葉がぴたりの山ふところに抱かれて育つた生徒は、素直で、人なつこく、明るい。しかし、他地域との交流の少ない山村僻地という特殊性からか、正しく自己主張をしたり、行動化したりすることががてで、感情を表現することも不得意である。そんなこともあって「豊かな人間形成と道徳的実践力を育てる指導」をテーマに、生徒の主体的な実践意欲を育てようと、全職員力を合わせて研究に取り組んできた。

ふだん、テレビ以外に、文化的なものに接する機会の少ない生徒たちに、少しでも良いものをと計画され、劇団「ブーポ」公演（六月）に統いて実施された映画教室（七月）後の一場面である。

それから数日たつある日、出勤していくと、三年生が特別教室の机（赤ちやけた色になり、傷や落書きもある）を、サンドベーパーで熱心にみがいている。男も女も力を合わせて、黙々と作業を続けている。「どうしたの。」ときな姿が、深い感動を呼んだのだ。

黙々と真剣にとりくむ（奉仕活動）

積極的に行動に移せない生徒が、自分たちの手で学校をきれいにしようとなつた。このあと、ニスを塗つて仕上げるなど張りきついている。

しかし、あの少女のひたむきな生き方から、一日一日をたいせつにし、目的をもつて一生懸命生きることのたいせつさ、すばらしさを感じとつてくれたのだと内心大いにうれしかった。

現代の若者たちについて、よくいわれる三無主義とか、シラケ時代とかいう言葉で象徴される風潮は、この山奥の生徒にも例外なく顕著にみられる。だが、この生徒たちは「眞実なるもの」「ほんもの」に接すれば、純粹に感動もするし涙も流す。チャンスと努力があれば可能性を無限に伸ばすことでもできる。「シラケ」きつているのではなく、「ほんもの」に接する機会が少ないとめではなかろうか。

そんな可能性を秘めた生徒に対しても、感動を与え、心をゆさぶるような質の高い授業をめざしているだろうか。「わかった」という喜びや、「やりとげた」という満足感を与えていたのだろうか。赴任して四ヶ月、すべてが新鮮に見えるはずなのに、惰性に流れ、初心を忘れ、生徒の心をゆり動かせないのではなかろうか。

心に翼をつけて大きくはばたけるよう、生徒との触れ合いを深め、日々の実践に全力を注ぎたいと覚悟を新たにしているこのごろである。